

介護職の医療行為に不安

八戸大 公開講座で意識調査

八戸大学・八戸短期大学総合研究所は26日、八戸大学で「介護従事者のための公開講座」を開いた。介護職

による医療行為をテーマにした分科会では、たん吸引などの医療行為を介護職員に認める改正介護保険法の成立

について考えた。介護職員からは医療行為の実施への不安も聞かれた。

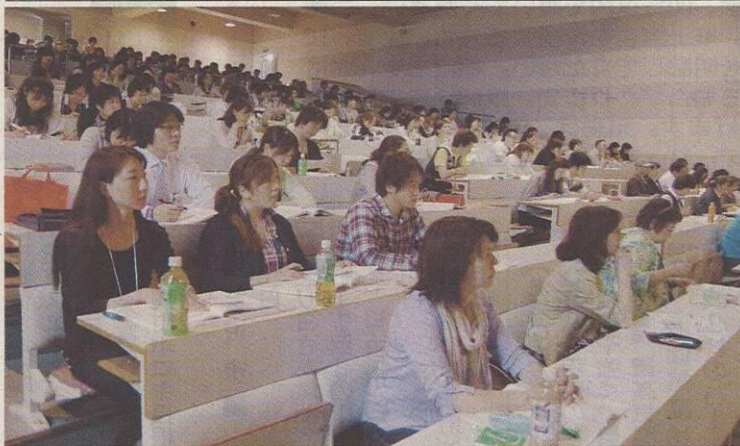
分科会の講師を務めた八戸大学の篠崎良勝准教授(介護労働)は、介護職の医療行為について「外付け補助行為」として、本来の業務ではないと指摘。加算方式で負担が増えるとして「診療の補助における介護職の分担領域が拡大していく。現場はどうなるのか」と懸念を示した。

その上で「生活の援助という介護の専門性を明らかにしていく必要がある」と訴えた。会場での参加者への意識調査では、「利用者の立場で、たん吸引を誰にしてもらいたいのか」の質問に対し、2

96人の回答者のうち、8割以上に当たる244人が「看護職」と回答。介護職の医療行為に不安を抱える実情が浮き彫りになった。このほか「介護職」は5人、「どちらでも」は47人だった。

階上町の女性介護福祉士(金巴)は「介護職の医療行為は、これだけの不安がある」と話していた。

公開講座は4年目で介護現場の課題などをテーマに10分科会が開かれた。全国から参加者が集まっており、今回は過去最多の約460人が参加した。



介護職の医療行為について考える参加者=26日、八戸大学